

なな

8月号
vol. 198

特集 芸術



vol.2

about me ~“わたし”を知って~

「海の仲間」
吉田昌弘
(ビッグ・アイあーと工房みずのみば)



芸術



vol.2

about me

～“わたし”を知って～

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会で、社会の関心が高まった障害者の文化芸術。誰もが文化芸術に親しみ、楽しめる「トビラ」が開き始めています。20年以上にわたって障害者の文化芸術活動の普及、推進に取り組んできた国際障害者交流センター（以下、ビッグ・アイ）。その取り組みを3号にわたり紹介します。

美術活動への 取り組み

ビッグ・アイは、前号で紹介した舞台芸術活動支援だけではなく、美術活動支援にも積極的に取り組んでいる。そのひ

とつに、今年7年目となる障害のある人の美術支援活動プロジェクト「about me」～わたしを知って～（以下アバウトミー）がある。

このプロジェクトは、美術活動を行っている事業所で活動を支える支援者の育成と、事業所間のネットワークの構築、

それを支える関係者、周縁の人の声とそこで生まれた作品を通して「人」「モノ」「ト」について対話を重ねる「考察会議」を行う。対話によって作家の日常や背景を多面的に浮かびあがらせていくのだ。作品だけではなく、障害のある人自身の活動や生活を丁寧に掘り下げ、気づきや課題、成果を可視化していくことによって、支援の充実につなげていくことを目指している。

対話から生まれる 新たな価値

実はこの考察会議がアバウトミーの一番の肝であり軸とも言える。糖分補給が必要になるくらい熱い会議だ。後半はいつも時間と体力が足りなくなる。

対話を重ねて浮かび上がる作品の見え方や本質、その作家自身を理解していく過程には支援の充実に必要なキーワードが飛び交う。しかしその一方で、核となりうるものを推理推測し確信めい

そして利用者、支援者ともに日々の活動の充実を図ることを目的としている。

具体的には、美術活動支援を行う美術家や有識者、福祉ジャーナリスト、福祉事業者（支援員）による実行委員会を結成し、美術活動を行う事業所を訪問。現場を見学し、障害のある人の日々の活動



た見通しを持ちつつも、決めつけはしない。丁寧に聞き取ることを大切にしている。正反対の意見になることや答えの出ないこともあるからだ。作家、一人一人に合わせた支援者の多様なアプローチと工夫、それによって変遷する表現に脱帽し、その支援のつまびらかさに息をのむこと



もしばしばある。

メンバーの価値観と経験、専門性、言葉を、時間をかけて重ね、作品とその先にある作家の想いに至る。それが考察会議だ。そして、そこで積み重ねられた対話と一人ひとりの作家の日常を作品とともに紹介する展覧会は、アバウトミーの集大成と言える。

以前、考察会議でこんな対話が繰り広げられた。

ある事業所の利用者の女性作家。事業所行事のバス旅行がとても楽しみで、旅行の日に近づいたり、行きたいと思う気持ちが高まるとバスの絵を描く。色とりどりの様々なバス。支援員からは、「これまでのバス旅行の思い出も込められているのかも」と紹介された。その女性の他の作品に目を向けると、白い画用紙の端っこに真っ赤に塗り込まれた赤いリングがポツンと描かれていた。彼女が描く多くの色とりどりのバスの作品と違つことが、みんなの目を引いた。メン

いく。支援員が日頃から培ってきた、作家本人との丁寧な関係づくりと理解、そして信頼関係があることに気づかされるのだ。

タイトルに込められた想い

タイトルにある「わたし」を知って「わたし」は、当初、障害のある人自身（わたし）を「作家」「障害者」としてではなく一人の「人」として知ってほしい、彼らの日々の日常を伝えたいとの思いから考えたものだった。

鑑賞者が「作品」、「モノ」や「コト」と対峙し、情感、作家自身の背景や人生の一端に触れたとき、様々な気づきや共感を得られる。それは、鑑賞する側の「わたし」自身を知ることになるのだと。アバウトミーを継続して活動している中で作家と鑑賞者を隔てたものが消えていくことに気づかされた。障害があること、生き



バーは、「何か気になる、わからないけれど気になる」「ぼつんとさびしい感じがした」「孤独を感じる」と、作家の感情に寄り添い作品を鑑賞するようになっていった。さらに「バスの絵はあらわになったコミュニケーションツールではないか？ リングの絵は見る側が想像する形でコミュニケーションが促される形になっている」「誰かに何かを伝えたいというより、自分の感情の起伏や変化があったのかな？」「自分自身に問いかけられている」「アバウトミー4 言語化できないコトバ」より抜粋など作家自身の声、言葉にできない伝えたい気持ちを受け止めようという対話が深まっていた。

障害の特性によって、表現したものが「美術作品」であるのか、作家から表出された「言葉」なのか……わからないままに「作品」として展示してよいものか判断が難しい場合も多い。そういったときは、考察会議だけではなく、支援員、家族の声を丁寧に聞き取って判断して

づらさがあるとしても、表現されたものを受け止める心はどこまでも普遍的で自由だ。誰にとっても「わたし」を知っていくことは、人と人との隔たりや生きていく中でぶち当たる垣根を超える大切なものなのだ。アバウトミーを通じて伝えたい。当初の「わたし」から現在の「わたし」を広義に捉えてほしいと思っている。

アバウトミーが紹介する作品を通じて目覚める、目には見えないけど確かな感覚と胸を締め付ける想い。誰しもが持ちうるどこまでもプリミティブでフラットな感覚を呼びさまし、社会の中にある様々な隔たりが消えていくことを願って今年も動きだしている。

文責：上岡亜希
（国際障害者交流センター
ビッグ・アイ）

<https://big-i.jp/spprojects/about-me/>





おかんのため息

- おかん はあ…。老老介護ってよく聞くやろ？
- ◆ 息子 お、今回もいきなり本題やな。
- 介護されてる方やなくて、してる方が先に亡くなったら、どうする？
- ◆ そら、大変やな。
- そうや。わたしの知り合いで、ご夫婦の夫が脳内出血で右半分全部麻痺になって、妻の万里さんが介護することになってんけどな。
- ◆ うん。
- 万里さんに大腸がんが見つかって、2週間ごとの入退院を繰り返すようになってな。
- ◆ え、じゃ、入院中の夫の介護は誰がするの？
- この夫婦は幸い、万里さんが入院中のときに夫もいっしょに入院させてくれてん。
- ◆ ええ病院やんか。
- そうやねん。で、万里さんが亡くなった後も、病院が夫の身柄を引き取ってくれたらしい。
- ◆ けど、そんな珍しいとちゃうか。
- 普通は、身内がいなかったら、ケアマネやヘルパーら現場の経験でショートステイを探してきて施設入所までのつなぎをしてる。
- ◆ なんか、綱渡りのような数珠つなぎのような。
- 上手いこと言おうとせんでええ。けど、何回かそんな見てきたけど、なんかかなってる。
- ◆ 現場の対応すごいね。
- ほんま。孤立せんように地域のつながりを作っておくのは大事やで。
- ◆ でも、最近、その地域の担い手が少なくなってるってよう聞くで。
- それや。地域って福祉や医療の関係も大事

- やけど、町会もけっこう大事な役割あるんやで。
- ◆ どんなこと？
- まあ、それはいろいろや。わたしも役もってるけど、やる気があって動く人に、いろんな負担がかかってる。あ、ごめん、これ、ただの愚痴。
- ◆ おかんは愚痴言うもんや。
- けど、「地域のつながりが大切や」ってがんばってる人いるんやで。
- ◆ おかん、けっこうがんばってるもんな。
- いや、大したことはないで。もっとすごい人してるし。
- ◆ 誰、それ？
- この前、次の連合町会の会長決めるの会議があつてんけど、「わたし、します！ 女でもいいんですか」って手を挙げて、連合会長になりはつてん。
- ◆ それはすごいな。
- うん、それで、楽しんでやってはるわ。
- ◆ そういう人じゃないと続かんわな。
- 今度、子ども神輿があつて女性部が手伝わなあかんねん。まあ、行くんやけども、「ギヤル神輿しようか」って。「する？」って聞いたら、「するよ、するよ」って答えて。
- ◆ ギヤル神輿？
- たしかにギヤルかも…。でも、そうやって一生懸命やってる人を見たら、いっしょにやろうって気持ちになる。自分もいっしょに楽しもうって。「大変やね」って言うたら「いや、わたしは楽しんでんねん」って。
- ◆ へえ。
- 彼女がすごいのは、イベントあつた後に「今日はお疲れ様でした！」って必ずショートメール送ってくるところ。
- ◆ マメな人やな。おれも見習わなあかん。
- ほんまやわ。定年退職したら、弟子入りしよかな(笑)
- ◆ じゃ、この町会は安泰やな。
- ごめん、ロト当たったら、引っ越しするから。…知らんけど。

つぶやきます。*本文は関係者各位の許可をとって掲載しています。



7月のGCCKidsは「七夕まつり」♪ 子どもたちがお家の人と書いた願い事を笹に飾り付け。先生が七夕のお話をしてくれたり、大きな声で歌ったりと楽しかったです☆ みんなの願い事が叶いますように！



たぐの 3くふうたま 豊 間

彼らはどこからきて、どこへいくのだろう。

ベクトル

ハナレバナレになった人とまち。 ぐらしの窓から紡ぐヒントを探してみる。

ゆく道を見失って疲れはてたか。ふと立ち止まって、過去に確かなものが見いだせないとき、未来への不安に苛まれたとき、再起の一步を踏み出すのはなかなか容易ではない。

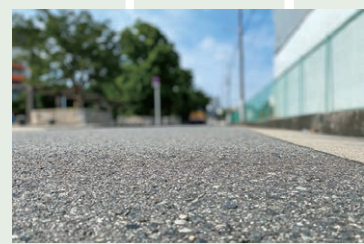
「ゆっくりして」とは言うが、あまりに長く立ち止まっていたら生きていくベクトル(力と方向)を失いかねない。大なり小なり力があれば、前か後ろかいずれかの方向へは進む。未来は分らないのだから正解も不正解もない。

歩き始めれば五感に刺激される。時に障壁を感じることもあがるが、色を感じ、音を感じ、匂いや風を感じ、大地を感じることもできる。

学校や仕事、その他あらゆる社会への関わりは、その推進力になる。僅かな刺激でも、与え続けることで何かが変わるかもしれない。

社会の物質的な原動力であるエネルギーも価格が高騰している。厳しい時代だが、助け合ひしかない。シェアハウスは大事な役割を果たせる。

(安田拓也)



[安田拓也]捨てられない。掃除と片付けは違って、汚れを取るのと捨てるのか否かの判断には使う精神力が桁違い。ため込むほど労力もかかる。実家の片付けを手伝ったが、時間が経って思い切れた。



[福井龍磨]F1を見なくなっただいぶ経つ。高校生の頃はシューマッハの全盛期で、ネットも今ほど発達していなかったためレース毎に雑誌を買って走っていた。その不便さも懐かしい思い出である。



[西田吉志]7月1日、西成地域の福祉の原点である「西成障害者会館」の設立30周年記念集會が開催された。会場には西成障害者会館とゆかりのある人々が集い、想い思いにその年月をふり返った。

葉っぱの吐息

私は草木が大好きです。とくに観葉植物には心癒されます。私と葉っぱとお喋りを聞いてください。



しばしの休息

公園でぐうぜん出会えた葉っぱ。初めましてと握手をかわした葉っぱ。太陽の光にかがやく葉っぱ。雨の雫をうける葉っぱ。小さくて愛らしい葉っぱ。大きくて逞しい葉っぱ。おしゃべりが上手な葉っぱ。ひとみしりで恥ずかしそうな葉っぱ。わたしを待っていてくれた葉っぱ。わたしが探し求めていた葉っぱ。これからも葉っぱに出会いたい。そして吐息を聞きつづけたい。

赤井まゆみ

2019年4月から今回で4年と8カ月の月日が過ぎました。これからも新しい吐息がたのしみです。

皮算用 胸算用

今年の7月は忙しかった。地元地域では15日に長橋町会の子ども神輿が町内を練り歩き、16・17日の両日は大国神社の祭りで神輿の渡御があった。コロナ禍で3年間実施されていなかった行事が今年は復活した。そして今月4日には地元の盆踊り大会が開催される。

いずれの祭りも夏の地域行事として長年続いているが、多くの方々から頂いた寄付のおかげである。子どもから高齢者まで誰もが参加でき楽しめるこうした祭りは地域のつながりをつくるためにも非常に大事だ。それを支える地域福祉活動をしっかり進めていこう。

(寺本良弘)



い湯かげん

高校無償化に大義あり

吉村知事の高校の学費無償化案に私学経営者団体などが反発している。部落解放運動は教科書無償化など歴史的に教育権保障に取り組んできたから、維新の代表であることとは無関係に、ここは吉村知事を応援したい。

教育保障には誰もが否定しえない大義がある。その意味で、本来は国の責務で行うべきだが、自治体先行も悪いわけではない。また、教育保障は国民の生活保障であり将来への投資でもある。日本では30年来賃金は上がらず格差と貧困が沈澱し、不信と苛立ちが募っている。久しぶりの生活保障は社会運動のはずみにもなるだろう。

とはいえ、政策に完全はない。公

と民も共に妥協点を探っていかなばなるまい。第一に、無償化は授業料だけで、しかも年間60万円までという上限がある。これを超える授業料は学校が支払うことになる。第二に、私学経営者の収入減は必ずだ。経営圧迫だという反発が予想されるが、無償化の趣旨には反対していない。条件交渉を通して民間らしく活路を見い出すだろう。第三に、無償化が大府民に限定され、府民と他県民で負担のちがいが生じるが、吉村知事は近畿圏に働きかけると言っている。その他にもいろんな弊害や矛盾への批判がある上に、維新の独特な物言いも過剰に不安を煽り、不信を招く。

このように知事案には不完全さ

や不安が伴うが、学費無償化の大義を否定するのは難しい。このチャンス逃すのは愚の骨頂だ。そこで、知事案を奇貨として教育保障のあり方を考えてみる。知事案では年収800〜910万円の世帯が新たに対象になることから、その眼目は経済格差の是正よりも教育の多様性の確保・尊重にあると仮定してみる。

より多くの高校生が私学のいわゆる「良い教育」が受けられるのはけっこうだが、競争に勝つための知識やツールを授ける機会が増えるだけでは、おもしろくない。また他方で、高校生の不登校数が過去最高になっていることを考慮すると、学校空間・システムそのものが機能不全に陥っていると捉えるべきである。したがって「高校無償化」は「高校改革」と連動するものでなければならぬ。

その両方に通底するコンセプトは知事案から導きだされうる。「多様性の尊重」で良いと思う。教育無償化は負担をなくすことで事足りるのではなく、高校での不登校や中退に



富田一幸

人間のしあわせ、福祉のあり方、そして新しい社会の結びつきを求めて、これからも「いい湯かげん」のテーマ探しに出かけます。

顕著な「ミスマッチの解消」も含むものでなければならぬ。それが多様性を尊重する教育保障ということだ。Aダックスワーク創造館が行っている西成高校や桃谷高校とのコラボは一石を投じていると思うので、注目して欲しいものだ。ただ、戦後民主主義がめざしてきた教育権保障を実現する高校改革は未だその原因を探り当てていないと思えない。時代に画期を成すかに見える吉村知事の高校無償化案は、高校改革の「始まり」を意味しているのかもしれない。そう考えると、吉村知事の高校無償化を評価する人も懐疑的な人も、提案や要望を持ち寄って知事に届けることが大切だと思つ。



[山村裕太]「夢を追い続けて、自分自身を信じて進みましょう。」←ChatGPTに一言コメント依頼してみました。ありがたいなJPOPの歌詞みたいなコメントになりました。



[若松司]亡くなった人の顔を見た。そういえば、久しくそんな機会にはなかった。艶はあるけど張りはなく、決して動くこともない。物質としての人の顔、穏やかな表情の死。

地域の縁を心でつなぐ

心の時間



うっかりして携帯電話を銀行のATMに置き忘れたので急いで戻ると、見知らぬ男性が私の携帯電話を誰にも分かるように持って立っていました。その男性は、三〇分待って誰も現れなかったら警察に届けるつもりだったとのこと。感謝の気持ちでお礼を申し出ると、「私には必要ありません。どこかに困った人がいたら手助けをして

てあげて下さい」と名前も告げずに去って行きました。かつこ良すぎる実話です。「ウィンウィン」などのように見返りを求める日常とは違う「施し」を受け温かい気持ちになりました。

元来、仏教の「施し」には、「笑顔で接する」や「優しい言葉をかける」など色々な行いが含まれます。施しは人を感動させ、その感動がより良い社会を実現する原動力になります。逆もまた然り。施しを無視した自己中心的な利益の追求は、諸問題を負の遺産として残しかねません。

今年もお盆の行事を迎えますが、お盆と施しには関係があります。「施し」について考えを巡らせる良い機会になりますように。

松向寺 通法

ココドコ

ここはどこ？
わたしはザンレ？
編集部が厳選した
「にしなり100景」
大公開！

夕方の気配がする住宅街の一角に、階段がそびえ立っています。よくありそうで、あまり見かけない風景。階段が必要な場所がどこかを考えると、答えに近づけるかも？ココがドコだか答えを知りたい人は、ゆ〜とあいの受付までお問い合わせください！

【先月号の答え】 南津守5丁目付近、千本松渡船場すぐの、メガネ橋の下でした！常夏バカンスの雰囲気を楽しみたいときに訪れてみてください。



2022年8月撮影

ゆ〜とあい

にしなり隣保館

にしなり隣保館「スマイル ゆ〜とあい」は、地域コミュニティ全体が抱える課題の解決をめざす民設民営の福祉施設です。日々悩んでおられる困りごとはありませんか？お悩み解決のためにできることをいっしょに探しましょう。

なび8月号(vol.198)
発行日:2023年8月1日(創刊日:2007年1月1日)
発行:株式会社ナイス
住所:大阪市西成区長橋3-6-33
電話:06-6563-1150
E-mail:info@nice.ne.jp
url:https://www.nice.ne.jp/

編集長:若松司
編集:沖田一志、笹川勝正、田岡秀朋、西田吉志、西原夏美、福井龍磨、安田拓也、山村裕太(あいうえお順)
イラスト:hidarimaki デザイン:谷口円

(株)ナイス
ホームページ

